

邪馬台国有力・纏向遺跡

邪馬台国の最有力候補地とされる奈良県桜井市の纏向遺跡で、昨年9月に大量のモモの種が見つかった人工の穴（土坑）の中に、多彩な海産物や栽培植物も埋められていたことが分かり、桜井市教委が21日、発表した。卑弥呼の時代の祭祀像が浮かび、市教委は「バリエーションに富んだ供物が並んだ祭祀が鮮明になってきた」としている。土坑（南北4・3㍍、東西2・2㍍、深さ80㍍）は「女王卑弥呼の宮殿」とも指摘される大型建物跡（3世紀前半）の約5㍍南にあり、3世紀中ごろの穴と推定。

市教委が土坑内の土をふるいにかけて動物の骨や歯、9760点の植物の種を採取。動物はマダイ、アジ、サバといった魚類のほか、ニホンジカやイノシシ、ネズミ、カエルなど10種が確認され、植物は73種類が見つかった。

植物の約半分は食用で2765点のモモを筆頭にイネ、アサ、コウゾ、ウリが多く、果実酒原料のニワトコやサルナシもあった。金原正明・奈良教育大教授（植物考古学）による花粉分析で、土坑周辺にモモ林が広がっていた可能性もあることも分かった。出土した種や骨は桜井市立埋蔵文化財センターで22日～27日に展示される。

アジ、サバ、ニホンジカ、イノシシ、イネ…

卑弥呼の供物？山海の幸

大量のモモの種が見つかった纏向遺跡の同じ穴から魚や動物の骨、イネなどの植物が見つかった。発掘担当者は祭祀の供物とみる。邪馬台国が纏向にあったなら、女王は何を願って神にささげたのか。今回の発見からは後の神道祭祀にもつながる祈りの姿が浮かぶ。中国の「魏志倭人伝」は、日本人（倭人）が「盛んに水に潜って魚や貝を捕り、イネを植え、生野菜を食べる」と3世紀の食生活を伝える。

食物献上強い権力か

奈良県立橿原考古学研究所の寺沢薫部長は「見つかった物の種類が豊富で、極めて盛大な祭祀だったのだろう。モモが異常に多いのは当時として珍しい食物はなく、現在の神社の供物と共通点が多い。魚などが支配下の地域からの貢ぎ物だったら面白い」と考える。古代、国を支配することを「食国」と表現した。服属する各地からの献上品を支配者が食べることに由来するとされる。

「まさに食国だ」とは同志社大の辰巳和弘教授（古代学）。「纏向に各地から食物を献上させる強い力があったことを示しており大王権とのつながりが見える」と話す。兵庫県立考古博物館の石野博信館長（考古学）は「現在のように神事後に供物を食する直会が行われていたのかも。邪馬台国が大和なら、卑弥呼の祭祀をほうふつさせる」と語った。

纏向遺跡の穴から見つかった多彩な動植物の遺物
—奈良県桜井市（渡守麻衣撮影）



和田萃・京都教育大名誉教授（古代史）の話 「各地から色々な食材が集まっているのは面白い。纏向遺跡が単なる農村ではなく、都市的な場所であったことを改めて明らかにしたことが重要だ」

卑弥呼時代 珍味お供え？

奈良・纏向遺跡

纏向遺跡から出土した骨や種子

マダイ、イワシ類、アジ科、サバ科、淡水魚 ※写真は神奈川県立生命の星地球博物館提供（瀬能宏さん撮影）



マダイ



淡水魚(コイ)



アジ科(マアジ)



シカ



イノシシ



ヒヨウタン

ニホンシカ、イノシシ属、カモ科、ネズミ類、カエル類

モモ、スモモ、イネ、アワ、アサ、ヒメコウゾ、エゴマ、ウリ類、ヒヨウタン類など

魚

動物など

植物

女王・卑弥呼が治めた邪馬台国の有力候補地とされる奈良県桜井市の纏向遺跡（2世紀末～4世紀初め）で、約10種類の魚や動物の骨、約70種類の植物の種が見つかり、同市教育委員会が21日発表した。骨や種は一度に埋められたものとみられる。古代の遺跡から、まとまってこれほど多様な骨や種が見つかった例はなく、研究者は祭祀の供え物が埋められた可能性が高いとみている。 34面に関係記事

魚や動植物 計80種

出土したのは東西約2・2キロ南北約4・3キロ、深さ約80メートルの穴（3世紀中頃）の中からで、2009年11月に見つかった3世紀前半としては全国最大の建

物跡の南約5メートルにある。この穴からは、すでに2千個以上の桃の種や、祭祀に使われたとみられる小さな土器などが出土していた。今回は掘り出した土を洗い流したところ、数万点の骨片や種などが出てきた。主に2、3ミリの小片で、煮炊きしたり、すりつぶしたりするなど調理した形跡は確認できなかったという。

魚はマダイ、アジ科、サバ科の魚、イワシ類、コイなどが見られる淡水魚の5種類。動物はニホンシカ、イノシシ属（フタを含む）の動物、ネズミ類、カエル類、カモ科の鳥の5種類。骨や歯は約1千点にのぼり、8割以上が魚。ネズミ類やカエル類の骨の

量はわずかしかなく、自然に混ざったものとみられている。植物のうち、栽培されたと思われるのは、イネやアワなどの穀物、桃、ウリ類、ヒヨウタン類、アサ、エゴマなど10種類だった。

杉山林継・国学院大名誉教授（祭祀考古学）は「神への供え物である神饌とみられ、神道祭祀の源流だろう。これだけの種類を集められたのは纏向遺跡に相当な権力者がいた証ではないか」とみる。

遺物は22日から2月27日まで、同市芝の市立埋蔵文化財センター（0744・42・6005）で展示される。（渡義人）

纏向遺跡・動植物の遺物続々

地道な作業 大きな成果

桜井市教委 3カ月かけ 土を洗い分析

邪馬台国の候補地、纏向遺跡（きょうむかう）の中核施設そばの穴から見つかった、膨大な数の魚や動物の骨片や植物の種。「鬼道」（きどう）（呪術）に通じていたという卑弥呼の祭りの内容を想像することも出来る貴重な発見となった。その影には数万点もの遺物を、地道に集めて分析した担当者の努力があった。

今回見つかった魚や動物の骨、植物の種は、種類に富むだけでなく、大きさも立派な物が多く含まれていた。魚の分析を担当した奈良女子大の宮路淳子准教授（環境考古学）によると、骨の大きさをからみて、全体的に小さな

サイズの魚が目立ったが、マダイは40〜50センチと立派なものだったという。植物の分析をした奈良教育大の金原正明・教授（同）も「穴から見つかった桃の種をみると、ほかに見つかる桃より秀でて大きかった」と驚く。

大きなタイを中心に様々な魚や穀物を供え、立派な桃を積み上げる――。そんな祭りの様子が浮かぶようになったのは、桜井市教委が穴にあつた無数の遺物を地道に調べ上げていったためものだ。通常の発掘調査では、時間

（渡義人）

や金、そして手間が膨大にかかるため、穴の中の土をすべて水洗いして、中身を調べることはできない。しかし、今回は、卑弥呼の宮殿跡との説が出て、大きな注目を集める大型建物跡のそばということもあり、市教委は土の水洗いを決めた。橋本輝彦係長は「発掘調査段階で、ある程度いろいろ出ると

推測出来たので決断できた。だが、さすがに魚の骨まであるとは想像外だった」と振り返る。昨年9月から土を市教委の施設へと持ち帰る作業を始め、積み上がった量は土囊（つぶ）400袋分。8人がかりで水洗いし、ふるいにかけて。小さな骨などはふるいをすり抜けてしまったが、竹べらを使っ

て丹念に調べて種類ごとに分け、作業終了までに約3カ月かかったという。兵庫県立考古博物館の石野博信館長（考古学）は「今回の発見は、王権祭祀を復元するのに貴重なデータを提供してくれた。全国のほかの遺跡でも、祭祀の穴を洗う努力をするきっかけになれば面白い」と話している。

祭りの姿解明、でも残る謎

《解説》 纏向遺跡で見つかった大量の動物の骨や植物の種、花粉は、古代の祭りの姿をかなりはっきりさせてくれた。やはり昔も山海の珍味が捧げられたのだ。建物跡や土器などからうかがうしかなかった祭祀に、現代と共通する部分があるとわかり、驚く

と同時にほっとする思いもした。纏向の人々はやつぱり私たちのご先祖様だったのだ、と。しかし、なおわからないことが残る。骨を鑑定した奈良女子大の宮路准教授によると、全身が残っているものがないうえに、調理などで骨を傷つけた跡なども見あたらない。さらに、一部の骨は火を受けて焼けていた。

今回分析が進んだのは、大量に出土した桃の種を一粒も逃すまいと、遺構の土をまとめて掘り上げたおかげだった。他の遺跡でも、祭祀をうかがう資料が見つかる可能性は高い。疑わしきは分析へ、という例が各地で増えることを期待したい。



様々な魚や動物の骨、植物の種が見つかった纏向遺跡の穴を調査する桜井市教委の担当者。いずれも桜井市



土の水洗いに使ったふるい。1ミリの角の大きさの金網が張られているが、すり抜けてしまうほど小さな遺物も多かったという

こうした特徴は、植物種子の分析結果にも共通する。食用にすりつぶすなどしたのではなく、粒のまま見つかり、食べた跡の便につきまものの寄生虫卵は確認できなかった。そして米には、弱い火で焼か

れた跡があった。どうやら、お供えの獣や魚を何らかの方法で解体して一部だけをわざわざ残し、ほとんど手を加えない種などにも埋められたらしい。それでいて、一部を火にかけている。そこにどんな儀式があり、なにを祈ったのか。対象はどんな神か。重要な手がかりは見つかったが、全体像の解明はまだ遠い。

（編集委員・小滝ちひろ）